

受賞論文

〈第22回学事出版教育文化賞受賞〉

児童の自尊感情を育む学校づくりをめざして ——打小発「きらめき言動」集の取組を起点として——

永田 守（元兵庫県芦屋市立打出浜小学校教諭）

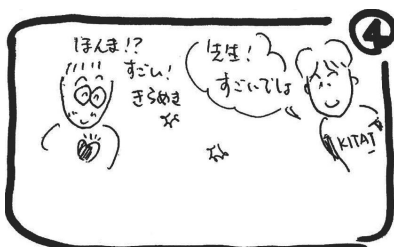
〈受賞の言葉〉

学校での子どものたちの様子をアンテナ高く感度をあげて見てみると、毎日、多くの「きらめき言動」が生まれていることに気づかされます。こうした目の前で起きた「無形文化財」を「有形文化財」にする有効な手だてが「きらめき言動」の取組です。これらが子どもたちや私たち教職員の「自尊感情」を育む力になると信じます。

取組の経緯

本校は、兵庫県芦屋市の南東、沿岸部に位

置する全校児童約450名の中規模校。創立以来、地域の学校としてあたたかい雰囲気を感じさせる地域に根差した学校と言えよう。一方で、しんどい背景を抱える児童や様々な配慮が必要な児童も少なくない。子どもたちはとても人懐っこく、子どもらしい半面、「自尊感情」がとても低いということが私たち教職員が一番の心配することだった。そんな悩みを抱いていた2017年、「なかまづくり」の研修会で講師に来ていただいた園田雅春さん（元大阪教育大学教授）から次のような言葉をいただいた。



「目の前の子どもたちから出発しましょう! 打出浜小学校の子どもたちは学校教育の可能性がたっぷりある。決めつけないで子どもの凹みの中のふくらみ(つぼみ)や目の前の子どもたちの『きらめき言動』をたくさん見つけることから始めてみませんか?」
「これだ!」

頭をガツンと打たれたような衝撃を受けたのを今でも思い出す。「子どもたちはみんな凸凹がある」「その子どもたちはまさにリアルで、様々な背景やしんどさ、期待や願いをランドセルに詰めて学校に来る」「自分を見てほしい! 認めてほしい!」「学校という集団生活の中でこそ、子どもたちの自尊心を

育んでいこう(集団的自尊心)」「子どもたちのいいところ(凸の部分)探しだけではなく、『しんどいと思われるところのしんどくないところ』(凹みの中のふくらみ)等を見よう!」。そして、その「きらめき言動を私たちが教室の中で①見つけて②価値づけて③発信する——そういった地道な作業を教職員があきらめずに繰り返ししていくことによって、子どもたちにあたったかい空気が広がり、人権豊かな学級・学校文化が育まれる」。学期末、打出浜小学校の教職員のなかに、「子どもたちの『きらめき言動』を集めた」と呼びかけた。すると、多くの『きらめき言動』が集まった。

「すごい!」

なんだか、心があたたかくなる何とも言えない気持ちになった。「打出浜小の子どもたち、なかなかやるやん!」「それを見つけた先生たちもすごい!」：きらめく宝石に出あった感覚だった。

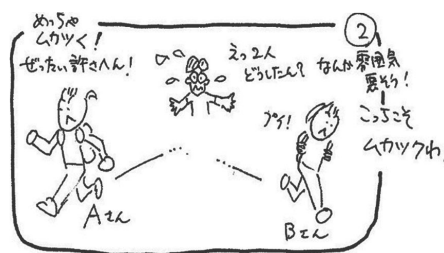
「これは、絶対、教職員のなかに伝えて、共有しないともったいない!」

少しでも楽しく子どもたちの『きらめき言動』を伝えるためにどうしたらいいだろうか?：考えた末、たどり着いた工夫が「4コマ漫画」だった。いくつかのエピソードを「4コマ漫画」にして『打小発「きらめき言動」集』として冊子で刊行したのがスタートだった。以降、全部で4巻を作成した。

取組の実際(打小発「きらめき言動」集より抜粋)から考える

①「よくいたずらをして叱られることが多いBさん」

すぐに教室でクラスの子どもたちにこの出来事を伝えると、「Bさんすごいやん!」「かっこいい!」と大絶賛され、Bさんはいつも見せないような笑顔をしたのが印象的だった。



た。後日、この4コマ漫画を連絡帳に貼り、母親にお知らせすると、「先生、いつも悪さばかりして叱られてばかりのうちの子どもがこんなことができるってうれしかったです! ありがとうございます」と返信があった。連絡帳には今もこの4コマ漫画が貼ったまま。そして、Bさんは翌年、自ら体育委員会のリーダーに立候補したのであった。

様々な研究結果によると、適切な「教師のうけとめ」がなされることによって、児童生徒の意欲を倍増することができると確認されている。また、「教師が児童生徒の適切な行動を見逃さずにその芽生え反応を評価するとき、児童生徒の他者受容度が約2倍も高まる」という調査結果も大変興味深い¹⁾。つまり、「①きらめき言動を見つけ②価値づけ③発信する」ことで、目の前の子どもたち同士が「つながり」が2倍にアップすることも期待できるのだ。これは「きらめき言動」を見つ

ける大きな効果と言える。

せられたことを覚えていて。このエピソードを授業で紹介すると、「かつこいいなあ」「私もそんなふうにできたらいいな」と興味を持つ子どもたちが多くいる。自分の学校で実際にあった出来事は、多くの子どもたちを「他人事から自分事に」そして「エンパワーする」力を持っているのではないかと推察する。

いくつかの教職員の声を紹介してみたい。

・子どもの悪い面ばかり目立って見えていたものが、良い面を探すようになり、子ども

② 修復的アプローチ

小学6年生の女子が大ゲンカ。2人の話を聞くこともできずに心配していた私の目の前で起こった「きらめき言動」だった。トラブルや嫌なことが起こった際、相手に対して攻撃的な言動をおこなってしまうことが多い中、このBさんの言動は全く違っていた。まさに、お互いの関係を「修復する」解決方法をとっていたのだ。まさに、見事な「修復的アプローチ」…ひと悶着おこるだろうとドキドキしていた私はびっくりさ

の小さな変化やつぶやき等、気付けるようになりました。先生の見方が変わったことで、子どもたち同士の見方もよい面が見えるようになりました。(40代)

・「宝探し」をしているような気持ちになります。「きらめき言動集」を読んでいると、「打小なかなかいぞ!」とチーム意識も高まります。(30代)

・職員室の中で「先生! ○○さんのきらめき言動、見つけました!」という話題が出る事が多くなり、うれしく思います。「へえー、○○さん、そんな一面があるんや。めっちゃすごいやん」と皆で共有し合う中で、子どもに対する新たな見方を教えられているような気がします。(50代)

これらの声から、目の前の子どもたちの姿への肯定的な眼差しへの変化がうかがえる。また、この「きらめき言動」集の取組について、岩瀬直樹氏は「教職員のチームづくりや力量形成に寄与している点において大いに評価したい」と述べており、チーム意識の高まりを教職員が感じ取ることができたことは予想外の成果だったと振り返っている。

成果と課題——2023年全国学力・学習状況調査「質問紙調査」から考察する

教育界の多くが全国学力・学習状況調査の平均点に一喜一憂するなか、私は同時に実施される「質問紙調査」に注目したいと考える。特に、今回は調査項目の中の「挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感、幸福感等」の結果から成果と課題を考察してみたい(以下は回答①「当てはまる」の数値である)。「4. 自分にはよいところがあると思いますか?」の項目は県・全国平均より約7ポイント、「5. 先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか?」は県平均より約10ポイント高い結果となっている。「自尊感情」や「自己有用感」に関するポイントが高位にあることは、この数年間の「きらめき言動」の継続した取組の成果であったと考察する。また、「いじめ」などの規範意識、子どもたち自身が感じる「幸福感」のいずれも高いポイントであった。この調査結果は子どもたちの「自尊感情」を育むことをめざしてきた私たちすべての教職員にとって大変うれしいことであった。

学校現場は「ブラック」とよく言われる。しかし、厳しい現実の中であるからこそ、私たちは知恵を出し合い、「同僚性」を育みながら、子どもたちの豊かな成長を願い、日々の教育活動をすすめることが大切だと思えてならない。互いに子ども理解を深め、より豊かな学びの場を創り出していく作業の大切な一つの起点がこの「きらめき言動」の取組だと振り返る。

「先生がきらめき言動を集めていることが『きらめき言動』だと思います」(4年生)という子どもの声があった。

「教育現場をブラックからブライト(輝くもの)に!」

私たち教職員の自尊感情を高めてくれるさりげない言葉:しんどい時、困った時、教職員みんなと共有していきたいと思う。

【注】

(1) 大石幸二「学校教育における発達支援根拠に基づく実践可能性」(サイエンスアゴラ2018資料より)。

(2) 岩瀬直樹(第55回〈2019年度〉小学館「実践! わたしの教育記録」全入選作品選評より <https://kyoikushojp/36607/>)